

機関番号：32633

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19390551

研究課題名（和文） 少子化社会の学生の特性に合わせた看護学導入プログラムの開発

研究課題名（英文）

Construct of introductory nursing courses program in the society of with a fewer number of children in Japan

研究代表者

菱沼 典子（HISHINUMA MICHIKO）

聖路加看護大学・看護学部・教授

研究者番号：40103585

研究成果の概要（和文）：看護学を学ぶ大学1年生は、ITを使いこなし、マニュアル化の中で育っており、その特徴は Generation-Y ととらえられた。大学での学びに対する彼らのニーズは、レポートを書くこと、グループワークで討議すること等への支援と、看護技術習得への支援であった。これらに対応して作成した教材は、学習の困難性を軽減することがわかった。しかし、試行錯誤しつつ、学生自らが思考過程を踏めるような、教育方法の開発が今後の課題となった。

研究成果の概要（英文）：Upon entering nursing school, Japanese nursing students are already sophisticated users of various digital technologies and manuals. They typify 'Generation Y'. Their identified learning needs were: writing reports, scholarly discussion and web-site materials for nursing skills. Providing these materials decreased students' learning difficulties. The next step is to develop learning strategies to promote critical thinking processes that include trial and error learning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2009年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
総計	10,500,000	3,150,000	13,650,000

研究分野：基礎看護学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：基礎看護学教育・看護技術教育・教材開発・Generation-Y

1. 研究開始当初の背景

本研究は、看護学の導入科目であり、かつ大学生生活への導入を兼ねる基礎看護学を担当する教員の、学生は生活体験がない・器用でない・マニュアルを好む・答えを知りたいが・コミュニケーションが取れない・レポートが書けないといった、実感から始まった。

少子高齢社会が到来し、高等教育機関への進学が当たり前になってきた状況で、大学1年生の特徴または学習準備状況が変化しているのならば、それに対応して、学ぶ主体である学生が大学生として看護学を学習できるように、導入期の学習内容、方法を変更する必要があるのではないかと考え、研究として

取り組むことになった。

看護という生活の密着した営みの中では、少子社会で学生の生活体験が少ないことが、教育・学習を困難にしているのではないかと仮定して、研究を開始した。

2. 研究の目的

学ぶ主体である学生を中心に、少子社会・全入時代の学生の学習準備状況に合った看護学の導入教育に当たる基礎看護学領域のプログラムを構築することを目的とし、以下の3段階の目標をおいて研究を進めた。

(1) 少子社会において生活体験が少ないと言われる学生の特徴をとらえる。

(2) 学生の特徴を踏まえて、学生の困難性を解消するための教材を開発する。

(3) これらの教材が、看護学導入時期の学生の困難性の軽減につながったかどうかの評価を行い、教材を修正する。

3. 研究の方法

(1) 学生の特徴の把握

このために3つの調査を実施した。

看護系大学入学者の生活習慣と生活体験全国調査

予備調査(論文)を基に、看護系大学1年生の生活習慣・生活体験に関する72項目の自己記入式質問紙を作成し、2007年11月に調査を実施した。全国の看護系大学79校から、4,601通を回収(回収率69.5%)、分析した(論文)。

学生が感じる困難性の調査

看護学導入期(入学から初めての臨床実習終了まで)の学生が感じる学生生活・学習上の困難点を、1大学の2年生進級時に15名、初めての臨床実習終了直後に9名、2度にわたって、グループインタビューによる調査を行った。学生に強制が働かないよう調査員をおき、教員は一切かわらず、十分な倫理的

配慮の下で実施した(論文)。

教員が捉える学生の特徴と教授方法の工夫に関する調査

看護系大学で基礎看護学を担当している教員を対象に、最近の学生について感じる変化、特徴と、それに対する教授方法の工夫を面接で調査した。授業に関する工夫について論文等で発表している大学から、地域性と設置主体を考慮し、協力を得られた7大学10名の教員へ面接調査を行った。さらに内容の妥当性を図るために、5大学5名の基礎看護学の教員から成るグループインタビューを行った(論文)。

(2) 看護学導入期の教材開発

学生の特徴は、少子社会における生活体験がないのではなく、Generation-Yと捉えるべき事が明確となり、また、高校までと異なる学習方法への戸惑い、学ぶ科目が看護学の中でどう位置づけられるかがわからないことが学習意欲への影響する、看護技術学習が困難なことが明らかになった。

そこで、学習方法に関するオリエンテーション教材(「レポートの書き方」「グループワークの進め方」)、学習内容の看護学における位置づけを示す教材を作成し、看護技術学習支援のwebページ(ルカーツ)を開発した(論文)。

(3) 教材の評価

作成した教材を2009年度1大学で使用し、学習の困難性の解消に役立ったかどうかの調査を実施した。ルカーツの活用状況については、アクセス数と閲覧ページの記録から、困難性軽減について、1年終了時と2年の初めての臨床実習終了時の学生計15名に2010年2月にグループインタビューを行った。学習方法や科目の位置づけに関する教材の評価は、1年終了時の計15名に2010年2~3月にかけてグループインタビューを行った。

(1)のと同様、倫理的に十分に配慮して実施した。

なお、すべての研究について、聖路加看護大学研究倫理審査委員会の承認を得ている。

4. 研究成果

(1) 簡便化・オートメーション化された社会で育った Generation-Y の学生

全国調査から学生の90%以上は同胞がいる中で育ち、子ども・高齢者・病者の世話の経験は少ないものの、日常の生活体験(料理・掃除等)は有していた。学生が自覚している困難性は、慣れない生活環境、大学での高校までと異なる学習方法、授業の位置づけの認識不足、看護技術習得、初めての実習への適応等が抽出された。また、教員からは、看護を学びたい学生ばかりでなく、大学の知名度で選択してきた学生が増えていること、自分で考えることや理解までの過程を回避して、回答を求める傾向があると感じていること、器用でないと感じる等が抽出された。

研究を始めた段階では、冒頭に述べた学生の変化は、少子社会が重要な背景になっていると考えていたが、調査の結果、学生は同胞がいて、生活体験もあり、教員が感じている困難は、学生は指摘していないことであった。子どもが少なく親が身の回りの世話をしている、家事もしていないのではないかと、生活体験が乏しいと、長らく言われ続けていたが、生活体験がないと教員が感じる背景は、違うところにあるのではないかとというのが、一番の論点となった。

少子社会、全入時代、生活体験の乏しさというキーワードが、学生の特徴を表すのではないとすると、何が学生の特徴を表すキーワードなのだろうか。

例えば考えるプロセスよりは回答を求めるという特徴は、無駄に見える努力をするより効率よくやるべきことがわかるというマニ

アル化から理解ができる。高等学校までの学習がマニュアル化された受験勉強と言われているように、試行錯誤を省いて、正答にたどり着くという訓練がされてきたのである。また、例えば面と向かったコミュニケーション能力が低いというのは、IT (Information Technology) 化に、その特徴を求められる。メールではやりとりができて、会って話すことが苦手で、その反面、ITを用いたコミュニケーション能力は高い。インターネットが生活の中に入ってきた社会で育った世代を Generation-Y と呼ぶが、その見方が、学生の特徴をよく表すのではないかと考察した。

もう1点は、IT化に伴って、より進化したオートメーション化の社会が背景となっていると考察した。雑巾を絞ったことがあると学生は思っているが、その絞り方が教員から見ると不十分ということや、手先が不器用という背景には、身体機能を使わずに生活できる便利な社会で育ったことがある。便利な生活用品の普及、生活用品の電化は、身体を使わなくても必要な動作ができる。それが普通になっている日本社会で育ったことを前提として、教育プログラムを考えていくべきであろう。

以上から、学生の特徴は身体機能を使わずに生活できる簡便化・オートメーション化された社会で育った Generation-Y と捉えた。

さらに、今回の調査ではっきりしたのは、これまでは看護系には目的意識の高い学生が入学してくると考えられていたが、動機付けのない学生が入学している事実である。動機付けのない学生に慣れていなかった教員の意識改革が迫られていた。

(2) 学生の困難性に対応し、Generation-Y に適した看護学導入期の教材開発

学生の学習上の困難を軽減するため、学生の困難性に対し、学生の特徴にあった教材を

作成した。大学での高校までと異なる学習方法は、グループワークとレポートが困難であった。方法のルールを示した「グループワークのやり方」、「レポートの書き方」のガイドを作成した。授業の位置づけの認識不足に対して、「科目間の関連図」を各教科で丁寧に説明をすることとした。これらは方法論がわかってその先の学習を進めるためのものであり、方法論から自分で探するのは効率的ではないと考えて作成したものである。マニュアル化に慣れた学生には、すぐ役に立つ資料となった。

看護技術習得、初めての実習への適応の困難に対しては、ホームページ上で、様々な情報を整えていった。各技術の手順、演習で行った手順と実習現場での違いや、上級生の感想、現場のナースからのメッセージも入れ、実習のイメージがつくように工夫した。この開発プロセスは、現場のナースと上級生との共同作業で行ない、学生のニーズに合うように工夫した。ITを使いこなす学生にとっては、いつでも、どこからでも利用できるHPは、適切な学習媒体と予測できたからであるが、この教材は良く利用されている。

(3) 教材の評価と今後の課題

生活体験は決して貧しくはないが、その中身が自分の身体を使わない方法に変化していることから、学生の日常生活の実際の行動を確認し、学生が知らないことは教えていく必要があると考えられた。また、ITの活用が上手で、マニュアルを好む学生の特徴に合わせた教材は、情報の伝達方法としては適切で、内容の理解には有用であった。こうした教材を使った学生は、方法がわかったことによって、より内容に関わることに困難が変化しており、一方で方法を提示されることが不自由であるという意見もあった。

本研究で作成した「グループワークのやり

方」等は、マニュアル化を促進する方法であり、自分で学ぶプロセスを大事にして、学ぶ方法を身につける大学の学習とは反対の方法を強化することになる。マニュアル化は労少なく正解にたどり着くことを促進するものであり、無駄な努力は払いたくないという姿勢を作ることになる。

そもそも学びというものは、一見無駄と見える努力、試行錯誤の中から自分で自分の答えを見いだしていくものである。高校までの学習がマニュアル化されていることが、我が国の人材育成上は大きな課題であるが、そういう道を通ってきた学生に、大学1年の時点で困難であっても、自分で学ぶことを学んでもらう必要はある。学生の「レポートの見本が欲しい」という発言に象徴されるマニュアル化を求め続けることを断ち切り、自分でもがく時期が必要であろう。その時間とその間のケアの手間をかけなければ、大学の教育までもが安易にマニュアル化に流れる恐れがあることに気がついた。

今後、方法論の提示から学生自らが思考過程を踏めるような、段階的な教育方法の開発が求められ、この開発は今後の課題となった。

本研究の教材の開発と活用、評価は1大学で試行したものであり、今日の看護系大学1年生の特徴をすべて網羅はしていないことは、本研究の限界である。また看護学を学ぶ動機がない学生への教育の工夫を扱えなかったが、この点は今後是非とも探求が必要であろう。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計6件)

菱沼典子、佐居由美、大久保暢子、石本亜希子、佐竹澄子、安ヶ平伸枝、大橋久美子、伊東美奈子、蜂ヶ崎令子、看護系大学1年生の生活習慣と生活体験に関する全国調査、聖路加看護学会誌、査読有、15(1)、2011、27-34

大久保暢子、佐竹澄子、大橋久美子、佐居由美、伊東美奈子、蜂ヶ崎令子、安ヶ平伸枝、石本亜希子、菱沼典子、看護学導入期の学生が感じる困難性の検討、聖路加看護学会誌、査読有、15(1)、2011、9-16

佐居由美、石本亜希子、伊東美奈子、大橋久美子、大久保暢子、佐竹澄子、蜂ヶ崎令子、菱沼典子、看護学導入期の学生の困難性に対応したWeb教材の開発、聖路加看護学会誌、査読有、15(1)、2011、17-26

安ヶ平伸枝、菱沼典子、大久保暢子、佐居由美、佐竹澄子、伊東美奈子、石本亜希子、基礎看護学担当教員の捉える学生の特徴と教授方法の工夫、聖路加看護学会誌、査読有、14(2)、2010.8、46-53

大橋久美子、菱沼典子、佐居由美、大久保暢子、石本亜希子、横山美樹、佐竹澄子、看護大学入学生の生活体験、聖路加看護学会誌、査読有、12(2)、2008.8、25-32

佐居由美、大久保暢子、石本亜希子、佐竹澄子、安ヶ平伸枝、菱沼典子、看護学導入プログラムにおけるシャドーイングアドバンスの試み、聖路加看護大学紀要、査読無、34、2008.3、70-78

以上すべて <http://arch.slcn.ac.jp/> にて公開

〔学会発表〕(計9件)

伊東美奈子、菱沼典子、大久保暢子、佐居由美、大橋久美子、蜂ヶ崎令子、佐竹澄子、看護学導入期の学生の学習上の困難性軽減をはかった試みと評価、第30回日本看護科学学会学術集会、2010/12/3、4、札幌コンベンションセンター

佐居由美、菱沼典子、大久保暢子、伊東美奈子、佐竹澄子、蜂ヶ崎令子、大橋久美子、看護学導入期の学生の困難性に対応したWeb教材の有用性、第9回日本看護技術学会学術集会、2010/10/23、24、ウィンクあ

いち(愛知県産業労働センター)

佐居由美、菱沼典子、大久保暢子、伊東美奈子、蜂ヶ崎令子、大橋久美子、佐竹澄子、看護学導入期の学生の困難性に対応したWeb教材の活用状況、第15回聖路加看護学会学術集会、2010/9/25、聖路加看護大学
安ヶ平伸枝、菱沼典子、大久保暢子、佐居由美、佐竹澄子、伊東美奈子、石本亜希子、看護学導入科目担当者の捉える学生の特徴と教授方法の工夫、第14回聖路加看護学会学術集会、2009/9/26、聖路加看護大学

佐居由美、菱沼典子、大久保暢子、佐竹澄子、安ヶ平伸枝、伊東美奈子、看護学導入期における看護学生の困難性、第14回聖路加看護学会学術集会、2009/9/26、聖路加看護大学

佐居由美、菱沼典子、大久保暢子、佐竹澄子、安ヶ平伸枝、伊東美奈子、看護学導入期の学生の困難性に対応した看護技術教材の開発 - 演習室と病室とのギャップを埋めるweb教材 - 日本看護技術学会第8回学術集会、2009/9/26、旭川クリスタルホール

Michiko Hishinuma、Yumi Sakyo、Nobuko Okubo、Nobue Yasugahira、Sumiko Satake、Minako Ito、Characteristics of Generation Y Nursing Students in Japan、The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science、2009/9/19 Kobe International Exhibition Hall

佐竹澄子、大久保暢子、菱沼典子、佐居由美、安ヶ平伸枝、石本亜希子、大橋久美子、看護学導入期の学生が感じる困難性の検討、第28回日本看護科学学会学術集会、2008/12/13,14、福岡国際会議場・福岡サンパレス

大橋久美子、菱沼典子、佐居由美、大久保暢子、石本亜希子、佐竹澄子、看護学部入学生の生活体験調査、第 27 回日本看護科学学会学術集会、2007/12/7,8、東京国際フォーラム

〔図書〕(計 0 件)
〔産業財産権〕
出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

看護学部入学生の生活習慣・体験調査報告書、2009 年 3 月
ルカーツ (Web 教材)
<http://www.lukarts.net/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菱沼 典子 (HISHINUMA MICHIKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：40103585

(2) 研究分担者

佐居 由美 (SAKYO YUMI)
聖路加看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：10297070

大久保 暢子 (OKUBO NOBUKO)
聖路加看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：20327977

佐竹 澄子 (SATAKE SUMIKO)
聖路加看護大学・看護学部・助教
研究者番号：40459243
(H19-H21)

安ヶ平 伸枝 (YASUGAHIRA NOBUE)
聖路加看護大学・看護学部・助教
研究者番号：20155683
(H19-H21)

石本 亜希子 (ISHIMOTO AKIKO)
聖路加看護大学・看護学部・助教
研究者番号：90439513
(H19-H20)

横山 美樹 (YOKOYAMA MIKI)
東京医療保健大学・医療保健学部・准教授
研究者番号：70230670
(H19)

伊東 美奈子 (ITO MINAKO)
聖路加看護大学・看護学部・助教
研究者番号：00550708
(H21-H22)

大橋 久美子 (OHASHI KUMIKO)
聖路加看護大学・看護学部・助教
研究者番号：40584165

(H22)

蜂ヶ崎 令子 (HACHIGASAKI REIKO)
聖路加看護大学・看護学部・助教
研究者番号：30385570

(H22)

(3) 連携研究者
なし